



Old Dominion (古き領土), Mother of President はヴァージニア州の別称です。この州は東海岸の中央に位置し、四季があり、神奈川県に近い気候であると言われます。独立戦争当時の13州の一つであり、最も古い歴史のある州の一つです。独立戦争から南北戦争に至るまでの間、政治・経済の中心地の一つであり、13州の中でも大州として君臨、初代大統領ジョージ・ワシントンをはじめ、アメリカの独立宣言を起草したトマス・ジェファソン (第三代) など数多くの大統領を輩出していることもあり、当時はヴァージニア王朝とまで言われたようです。日本に喩えるならば、奈良や京都のようでしょうか。

私はこのヴァージニア州リッチモンドにある Virginia Commonwealth University (VCU) の Internal Medicine, Pulmonary Division, Norbert F. Voelkel教授の指導の下、研究を行っています。このラボは以前コロラド州デンバーにあり、肺高血圧、肺気腫の研究が盛んです。約3年前に当地に移動したのですが、(この大変な移動の詳細は当科北口良晃先生による「リッチモンド便り」を参照下さい)、今年の5月までの仮住まいから本拠であるMSB2 (Molecular Science Building #2) という建物に移動し、ようやく落ち着いて研究ができる体制が整ったところだと思います。肺気腫グループはコロラド時代からの指導者が誰も来なかったこともあり、実験系の確立までに長い時間を要しました。そもそも、小動物の肺気腫モデルというものを作成することはなかなか根気のいる作業であり、たとえば本モデルとして確立されている喫煙による肺気腫モデルを作成するには最低でも6カ月程度の喫煙曝露が必要です。現在、

ようやく新規のモデルもでき始めデータを取り始めています。

私は本研究留学に赴くにあたり、「なぜアメリカという国に世界中の人達が集まるのか」「何が日本と比べて違うのか」ということを感じてきたいと思っていました。そのような視点でみた私個人のアメリカ感を少し書いてみたいと思います。生活をすれば旅行と違い、個人との付き合い、生活のための買い物、税金などの支払い義務、教育などを通してその国の社会システムが見えてきます。アメリカの社会人の基本的な労働スタンスは日本人的な感覚から言えばかなり余裕のある労働状況に思えます。一方その仕事内容を見てみると、忙しいはずの日本の方がずいぶんきめ細かく確実に、こちらはアパートの装備品の修理を頼んでもなかなか来てくれない、手続きの完了までに時間がかかる、既に変更したはずの依頼に対して変更前の情報が電話や手紙で届くなどは日常茶飯事です。どうしてこのような状況で世界の皆が行きたがる国、世界一の経済大国足り得るのでしょうか。いろいろ考えてきたつもりですが、つまるところ、広大な国土、そこに眠る資源、多様な人種、文化を受け入れてきた歴史がそうさせていると感じました。国、人、資材、なにをとっても“余裕”を感じます。この余裕が新たな経済発展を生み人材を引き付けてきたのでしょうか。また会話による意思疎通が十分でなくても何とか生活できてしまう。同じような経験をしている外国人が近くにいるので助けてくれる、この「何とかなる」という感覚(住んでみると実感としてわかるのですが)は、暮らしていく人間にとって魅力だと思います。

私の留学生活もすでに後半ですが、医学研究というものだけに労力・能力を費やせるという恵まれた環境を生かして何がしかの結果と今後信州大学に貢献できる研究テーマや実験系を持ち帰りたいと思います。最後になりましたが、留学の機会を与えて下さった久保恵嗣教授、花岡正幸准教授ならびに僅少とは言え小生の抜けた穴をサポートして下さっている医局の皆様方に感謝申し上げます。また私ごとではありますが、本留学にあたり、自分たちの生活環境を大きく変えて同伴してくれている妻と子供達にも感謝の意を表して拙文を終えたいと思います。

(2009年10月15日, Richmond, West Endのアパートの自室にて)

(信州大学医学部内科学第1講座所属)